

平成 26 年度 生田緑地マネジメント会議全体会 議事録

1. 日 時 平成 27 年 3 月 24 日(火) 9:00~11:00

2. 場 所 かわさき宙と緑の科学館 2F 学習室

3. 議事概要

○建設緑政局緑政部長挨拶

【承認事項】

○生田緑地マネジメント会議の会則変更について

○会員の入会について

○マネジメント 会議役員・運営委員（コアメンバー）の改選について

【報告事項】

○会員の退会と入会について

○クラブハウス跡地利用計画について

○平成 26 年度生田緑地マネジメント会議のふりかえり

【意見交換会】

・テーマ：『生田緑地のファンを増やしていくために』

【アドバイザー 涌井史郎教授からのお話し】

【その他】

○事務局からの連絡

・会員の受賞について

・平成 26 年度の活動報告書、平成 27 年度の活動計画書、事業計画書の提出について

4. 配布資料

・次第

・資料-1. 平成 27 年度生田緑地マネジメント会議 全体会 配布資料

・資料-2. マネジメント会議会則(案)

・資料-3. マネジメント会議会員名簿(案)

・資料-4. マネジメント会議会員の入退会について

・資料-5. 会員の表彰について

・資料-6. クラブハウス跡地利用計画案

5. 議事内容

○挨拶等

(事務局)

- ・ 本日の出席は 28 名。過半数を超えてるので会議は成立する。

(建設緑政局緑政部長)

- ・ マネジメント会議も平成 25 年に発足して 2 年経った。来年度に入るにあたりいろいろと反省、課題、ふりかえりをしなければならない。本日そういう話し合いをすることができればと思う。
- ・ 平成 27 年度に川崎市の公園行政の大きな節目を迎える。川崎区には富士見公園という

大きな総合公園があるが、これが川崎市の第 1 号の都市計画公園にあたっており、平成 27 年度は 80 周年を迎えることになっている。また緑の基本計画についても改定の作業に入っていくところである。2017 年が目標年次であり、これから 2 年間かけて環境審議会に諮問をかけて審議会の有識者や市民の意見を聞きながら改善作業に入っていく。

- 80 周年の公園行政を振り返るなかでは生田緑地が非常に大きい意味を持っている。特に生田緑地の緑の基本計画については、協働というものを非常に大きなベースにおいて進めており、指定管理者だけでなく大きな意味でのパークマネジメントを開いていくことになっている。非常に大きな取り組みが平成 27 年度から動いていくことになる。この生田緑地マネジメント会議は、緑の基本計画を実践していく中で非常に大きな財産になっていくのではないかと思っている。特に愛・地球博記念公園を参考にしながら生田緑地スタイルを推進しているものであり、全国的にも注目を集めている。行政の方も一所懸命がんばってやっていかなければならない。
- 飛森谷戸の自然を守る会が国土交通大臣賞を受賞したことを報告する。

(会長)

- この会が始まって 2 年経って本当にいろんなことで変わったと思う。変わってやりづらいと思っている方もいると思うが、よくなつた面もいくつもある。また、今日の会がこれからここを変えていこうという話し合いになり、もっと来園者を増やしていくきっかけになればと思う。

【承認事項：生田緑地マネジメント会議 会則の変更について】

(事務局)

- コア会議とコアメンバーという呼称が混同しやすいため、コアメンバーを運営委員と変更して区別を明確にしたい。

(会長)

- 最初、ここで言っているコア会議がなかった。コアメンバーを中心に運営会議を 2、3 ヶ月に 1 回開催していた。その運営会議のための打合せが必要ということで、事務局と会長で調整していたものが、それではまずいということでコア会議というものを新たに運営することになった。そのことがあって言葉がややこしくなつたので言葉の整理をするという趣旨である。内容について承認をとりたい。

(特に異議なく承認)

【承認事項：会員の入退会について】

(事務局)

- 国土館大学磯谷達宏様よりマネジメント会議に入会したいという申込を頂いている。

(会長)

- 専門的な見識のある方に仲間に使っていただけるということになる。入会について承

認をとりたい。

(特に異議なく承認)

【承認事項：会議役員・運営の改選について】

(事務局)

- マネジメント会議の役員の任期は2年間なので改選を実施した。会員の推薦によって、薬袋会長、井口副会長、佐藤副会長、岩田自然環境保全管理会議副会長が再任となり、自然環境保全管理会議会長に磯谷達宏先生という案となった。

(会長)

- 自然環境保全管理会議の会長が辞任されるということで、新たに磯谷先生を会長に推薦している。会議役員及び運営委員の案について承認される方は举手をお願いしたい。

(举手多数で承認)

(会長)

- 私自身は造園系ではなく都市計画計のこと普段やっているが、生田緑地はまちのなかの緑という点に特色がある。私は平成の里山と呼んでいるが、この平成の里山をみんなでどうやって支えていくかを考えていくためのお手伝いをもう一回できるということをありがたいと思っている。

(副会長)

- 生田緑地整備事務所としては多くの緑を守ることと、多くの人に来園してもらうということをバランスよく調整していくことが重要だと考えている。

(自然環境保全管理会議副会長)

- 生田緑地の自然保全活動を始めて11年間が経った。川崎市は50年前から都市化が進み、外から見てもう自然が残っていないと思われがちだが、生田緑地にはまだ多くの自然が残されている。神奈川県ではすでに絶滅したものが生田緑地にはまだあるので是非これを後世に残したいと思って活動を続けている。
- かわさき自然調査団だけでなくいろいろな立場の人が生田緑地の自然を残していくためにどのように関わっていくのかを議論するのが、自然環境保全管理会議の主なテーマだと思っている。

【報告事項：会員の退会と入会】

(事務局)

- 生田緑地雑木林勉強会が退会し、ともしび会が入会した。

(会長)

- 生田緑地雑木林勉強会は団体そのものが解散した。ともしび会は町内会である。

【報告事項：クラブハウス跡地利用計画について】

(みどりの保全整備課)

- 行政としては当初、生田緑地を周遊する散策路を整備する中での休憩ポイント、段差

を活かした眺望を活用した広場、憩える広場として整備したいという考えがあった。

- ・ 2回の意見交換会において頂いた意見では、「眺望を活かすためのデッキを設けてほしい」、「特に遊具などを整備せず、どんぐりを植樹した森の整備」、「斜面地で安全面に課題があるので人が立ち入らない施設」、「旧クラブハウスの歴史を感じさせるものを入れていただきたい」といったものを頂き、これを受け3案を策定した。
- ・ A案では眺望を活かしたデッキを中心とする案。B案ではどんぐりを植栽するという意見を活かした案、C案では行政の最初の目的を中心とした案を考えた。
- ・これを元に検討を重ねた結果、3案のいいところを取り入れて、展望デッキと最初の目的の回遊性を確保し、ゴルフ場と一体となった景観を併せた植栽を中心としたプランに落ち着いた。

(会長)

- ・ この件については、マネジメント会議の進歩した点が表れている。今まで川崎市では計画を策定する際に説明会などを開いてきたが、大半は計画の変更ができない状況になってから説明会を開いていた。今回はまだこれから設計をするという段階で市民との調整の場が設けられた。みんなで積み上げていくということの第一歩が踏み出せたのではないかと思う。

(向ヶ丘遊園の緑を守り、市民いこいの場を求める会)

- ・ 画期的な方針転換でよかったと思う。跡地には人が立ち入らないのかどうか確認したい。ここは日常的に人が通らないところで、斜面で見通しが利かないため人に立ち入ってほしくない。

(みどりの保全整備課)

- ・ 最終的に決定していないが、もし人が入れるとしても夜間は施錠するなどの配慮はしていく。

【報告事項：平成26年度生田緑地マネジメント会議のふりかえり】

(事務局)

※パワーポイント内容説明

(会長)

- ・ 昨年度議論したことで本年度実施したモニタリングであるが、お互いの事情や意見を理解して議論することが必要である。どうしてこんな工事を行ったのかみんなで見に行くということは、本当に大きな一歩を踏み出すことができたと思っている。今後も継続してやっていくべきことと思っている。
- ・ 自然会議もやりかたを試行錯誤しながらみんなで共有していく部分を増やしていただいた。詳しく説明していただき、開かれたよい会議だと思っている。
- ・ 新聞記事に取り上げられたものを列挙した資料を用意してもらったが、これだけ多く取り上げられている。インターネットなどで検索してもらって自分の知らない生田緑地を知るきっかけにしてほしい。

【意見交換会：生田緑地のファンを増やしていくために】

(事務局)

- ・ 4つのテーブルに分かれていただいているが、「自然」、「おもてなし・ガイド」、「地域連携」、「フリートーク」の4つのテーマに分けて、生田緑地のファンを増やしていくためにどうしたらよいか、何をしたいかを話し合ってほしい。特に若者、外国人をキーワードにこれらの人を多く呼び込むためにどうすればよいかの視点で話し合いを行ってほしい。

(おもてなし・ガイド班)

- ・ ツールとして地図を表記して外国人の方が見えるようにする、現状としてスタッフが不足しているなど意見が出された。また外国人がキーワード検索できるようなネット環境を整備するといったことはツールとして絶対に必要になってくるという意見があった。
- ・ もっとタイムリーに活用するような簡易なサイン、人を介して案内するような小さな印刷物など案内にあふれる環境、景観と案内と一緒に考える、一体としたおもてなしが重要なのではないかという意見もあった。
- ・ 商店街の魅力を高める。生田緑地だけでなくもう少し広い範囲での周遊性を考える。藤子ミュージアムのバスを向ヶ丘遊園駅経由にするといった意見もでた。
- ・ まとめると、今外国人に対する案内やツールづくりはできるが、受け入れ態勢をもう少ししっかりしたものを作つてから、おもてなしや案内をじっくり考える。準備段階にまだまだ課題があるのではないかという結論になった。

(フリートーク班)

- ・若い人を呼ぶには、サブカルチャー的なイベントを実施すればよいのではないか。昨年ばら苑でコスプレイベントを実施しようとしたと聞いている。新しい企画として人を呼べるのではないか。
- ・ドラえもんのコンテンツをうまく活用できないか。生田緑地全体でドラえもんを体験できるようなツアーができるかといった面白い意見も出ている。
- ・外国人に来てもらうには、民家園のような昔からの伝統のあるものに興味があるだろうと思うので、それをアピールすればよいのではないか。民家園で時代劇をやると言った意見もあった。また、オリンピックの関連イベントを生田緑地で実施できないかという意見もあった。
- ・生田緑地は初めてくる人にはわかりにくいところであるので案内を整備しないといけないのではないか。外国人に来てもらうにはPRがカギではないか。ツアーガイドに乗せるとかSNSの充実を図ることが重要という意見も出た。
- ・食のイベントを実施すれば若い人も来やすいのではないかという意見もあった。

(自然班)

- ・ 自然をタイムリーに知つてもらう機会が少ないのでないかという意見がでている。対応としてホームページの充実、そこへ1週間に1回生田緑地の自然をアップして状況を知つてもらう。また、ビジャーセンターに花の見ごろなどの植物の情報を提示したらいいのではないかという意見が出た。
- ・ 生田緑地全体をつなぐガイドがあつたらいいのではないかという意見がでた。またガイドだけでなく短時間に高齢者、子育て世代などの属性別にコースを設定し、ビジャーセンターに置いたらよいのではないかという意見もあった。
- ・ 外国人が来る場合、来園者のブログが口コミで広がつて来園者が増える場合があるのでそういったものを活用するという意見があつた。
- ・ 生田緑地のなかを歩いていて自分がどこにいるのかわからないというケースも多いので、案内やサインを設置した方がよいという意見もあった。
- ・ 来園者が増えるのもよいがマナーを啓発することも大事という意見もあった。

(地域連携班)

- ・ 近くに住んでる若い人・大学生と情報共有ができていないのではないか。情報共有すること、大学の関係者が集まる会議にこちらから出向いて情報を提供することも必要との意見があつた。
- ・ 町内会との連携として、町内会のお祭りを生田緑地でできることをアピールすることも必要との意見もあつた。また、現在は一部の町内会としか連携出来ていないので、もっと町内会に連携をアピールすることが必要という意見があつた。

(会長)

- ・ 貴重な意見がたくさん出てきた。次の1年間につなげていく議論ができたのではないかと思う。今日のキーワードは、来ていただきたい方のところに、心に届く情報をどう発信していくか、ということだと思う。情報発信自体は以前に比べ相当にやってもらっているが、今来てもらいたい方々にうまく伝わっているやり方ではないのかと思う。あるいは周りの人にうまくこっちを向いてもらうような内容になつていいのではないかという気がする。次の1年間の課題は私たちのメッセージや情報をどういう場で、どうやって、どのようなツールを使えばうまく伝えられるかを試行錯誤する段階なのかという気がする。みなさんもよい知恵があつたらぜひ協力いただいて、情報交換していきたいと思う。

○アドバイザー 東京都市大学 涌井史郎教授 のお話

- ・ 今日の様々な議題の中で、皆様のご活躍の結果が飛森谷戸の自然を守る会の国土交通大臣賞受賞や多くのメディアでの露出から、多くの人が生田緑地に期待していることが読み取れる。われわれが発信したということもさることながら、日常の世界の中

から消えているものがどんなものなのか、受信の側が積極的に社会化したいということを願っているのではないかと感じている。

- ・ みんなの議論の流れのなかで、いかに生田緑地の素晴らしさの認知を図るのかということと、認知をしてもらうためのきっかけ、そして利用のマナーをどうするのかというところに收れんすると思うし、結論から言えば、会長が発言されたようにいかに心に届く情報を発信していくのかということだと思う。
- ・ 今日のマネジメント会議の資料内容は、1枚1枚が極めて画期的である。坂本竜馬の船中八策に匹敵する。どういうことかというと、こういうことが本当に行われていない。一番大きな問題は、これまでの施策や政策は上位計画からのワンウェイの流れであるが、成熟した民主主義社会はユーザー・オン・デマンドとして我々の側から積み上げて、より上位の計画に上がっていくというプロセスを探らなければいけない。実は両方必要なのだが、生田緑地マネジメント会議で行っていることは、愛・地球博記念公園のマネジメント会議と並んで、今はひょっとすると一步進んでいるかもしれないが、非常に貴重な取り組みをして頂いているという理解をして頂きたい。
- ・ 公園は誰のものなのかということが非常に重要なキーワードであるが、一方では公園の利用効用という側面だけが経済偏重社会では強調されてきた。緑地と名のつくところは、どんな時代にあっても変わらない価値、それをどうやって次の世代に伝えていくのかという意味合いで存在効用を持っている。その存在効用をどれだけ多様な市民が生田緑地があってよかったと思える状況をそうやって作るのかが非常に重要だと思っている。
- ・ そういう意味で3つのトピックスをお話します。ひとつは先週、仙台で開かれた国連防災会議。第1回は横浜、第2回は阪神淡路大震災の復興がある程度なったということから神戸で開かれた。第2回で初めて国際的に連携して防災の問題にどう対応するのか枠組みを考えようということで兵庫行動枠組みというものが指針として示された。
- ・ ところが今回の第3回では非常に話が具体的になってきた。とりわけ一番大きな論点は、防潮堤に象徴されるような多額な資金と最先端の工学的知見を活用して環境悪化や自然災害に対応する手法と、生態学的な機能を十分に尊重しながら防災、減災にそれを活用していくとする手法をどう考えていくべきなのかという議論が初めて国際的な議論に顔を出してきた。これは非常に重要な意味がある。
- ・ なぜかというと、我々はいつも成長志向をしているが地球は成長しない。むしろ我々の浪費によって縮退の方向にある。そういう現状にあって我々自身が自然と向き合う姿勢はどうあるべきなのかといったときに、防災や減災の問題も人間はもっと謙虚になって、自然の恩恵に対して謙虚な姿勢で臨めばよい。例えば防潮堤ができると磯焼け現象が起きる可能性が非常に高い。地下水をせん断してしまうためにミネラルを含む地下水が磯の方に流れていかない。そうすると海藻が十分に育たなかったりアワビやトコブシといったものに栄養が届かなくなる。非常に貧栄養な海浜が出来てしまいバランスが崩れてしまうということが起きるということが現実に起こっている。
- ・ それ以上に田老町を見ていただければわかるように万里の長城で絶対に大丈夫だと言

っていた防潮堤であるが、なかへ行くと東京拘置所に入ったような気分になる。つまりずっとコンクリートの壁が続いているのである。海に生きてきた人たちが海が見えないという状況でどうやって危険を予知するのか。岩手県側は平野がないため、それぞれの裏山で海が見渡せるところを日和山と呼んでそこから海を眺めていた。そこで魚群を見たり天候を見る。一方では津波が来たときにどこまで及ぶのか潮がどこまで引くのかを見ている。仙台平野では高い山はないので、人工の山を築いてこれを日和山と呼んでいる。駿河湾に行くと命山というもっと端的な名前になって付いている。この仙台平野の仙台海浜公園で遊んでいた人々は、あの津波のときに日和山の頂上に登って助かったという人が何人もいる。

- ・我々はいかに自然に対抗できるという思い違いをしても自然の持っている恵みとか力にはかなわない。だとすれば、それを最大限に生かすというような方法をとることが非常に重要ではないかということである。
- ・もうひとつの観点からいうと、日本はいまだにからうじて 300 km の東京湾の最高潮位 +7.2m の防潮堤を築くだけの財政的余地を持っているが、スーパー台風 30 号が起きたフィリピンのレイテ島あるいはバンダーチェンの津波があったバングラデイッシュやインドネシアではそういう防潮堤を造るだけの財力はない。ところがバンダーチェンなどではっきりしてきているのは、海浜の目前にあるマングローブ林をしっかりと大事にしてきたところ、土地利用として小高い丘に集落をつくりその手前側に耕地をつくるというようなところは人的被害がほとんど出ていない。仙台の貞山堀やその手前の松林で津波が相当に減退したことも事実である。つまり我々はもう一度人間と自然が呼吸しあう関係をどう作り出すのかということが非常に重要な観点である。
- ・こういう議論がようやく国連の舞台でなされるようになったということは非常に画期的なことである。
- ・いま大都市圏においてどういう政策をとるべきなのか、ということは国土交通省を中心に議論されている。これからみなさんにぜひ気をつけていただきたいのが、関心を持っていただきたいということである。いま新自由主義経済学者が非常に台頭している。一番わかりやすいのはリニア新幹線なのだが、あれで名古屋を東京の郊外にしてしまおうとしている。2030 年から 2050 年には日本は大変な苦境に立たされる。それは高齢化社会により生産人口が減り日本の経済が経団連の最悪のリポートでいうと世界 18 位、最善でも 13 位に落ちてしまう。そのことによって経済が悪化してしまう。
- ・だとするとスーパーメガリージョンという言葉を使って東海道メガロポリスに 5,000 万人の人口を集めてこれが活躍すれば日本を救えるのではないか。そういう国土づくりを進めていくべきだという議論がまかり通る状況になっている。では地方の人たちがどうするのか。もうひとつその議論の延長線上に機能集約的都市づくりいわゆるコンパクトシティ。これは不賛成ではないのだが、例えば川崎ならいくつかの拠点に人口を集中させあとはがんばってという感じでまちづくりを進めようというものである。こういう可能性がどんどん際立ってきてている。その時に一番重要なのは残された地域をどのように幸せな地域にしていくのか。そこにあるのは都市内農地、市有地の裏山

といったものが売れなくなっていく。こうした環境資産をどうやって活かしながら新たな人口減少社会に対応した都市像をつくるのかという議論がすっぽり抜け落ちている。これが大きな問題である。中心市街地の活性化の議論だけが前に進んで、それを支えている近郊の地域の議論がすっぽり抜け落ちている。これでいいのかというのが私の心の叫びであり、そこをしっかりと計画的方策とりわけ緑を資産に置き換えていく、環境不動産価値という価値、潜在化している価値を顕在化していくのかという議論をしっかりしていかなければならない。

- ・われわれの先輩たちが生田緑地を防空緑地という名目で残していくことを振り返って考えてみると、残されたこの地域をどれだけ大切にするかということが極めて重要である。ここで培われてきたものがこうした存亡の危機にある緑地資源をどうやって維持していくかということに不可分につながっていくということをぜひご理解いただきたいというのが2点目である。
- ・3点目は公園はだれのものなのか。いま日本全国で公園の蓄積量は12万haに及んでいる。こういうものは一体だれのためのものなのか。国や自治体が整備したものであればその基礎ルールに従って使ってもらうのはマナーが成熟していない以上、当然のことだが、もう一度それを原点に返して、我々がマナーをきちんと守る。したがって我々のための公園にして下さいという、こういうアプローチが非常に重要な時期に来ている。
- ・先ほど会長が指摘されたように、今回のクラブハウス跡地のプロセスは狂天倒地なことである。社会资本整備で公共の税金の入るところに地域の住民の声がしっかりと反映されるというプロセスを原則論に従って踏襲してプランを形成したということは、かつてないことである。みなさんの力でそれが実現できている。こういう動きはユーザーの側からどうやって意見を計画に反映していくかということを考えざるを得ない世の中になるし、そういう方向を強調していかなければいけないときに非常に重要な力になる。
- ・ただしそのためには3つの原則が必要で、自ら利用のマナーを実践し、それを先導するということが一つ、同時に対立ではなく融和しながら楽しくみんなで利害調整をしてひとつの公園内民主主義のようなものをつくりながら一つの方向を目指す。それから地域によって特色が違うため、それぞれの公園緑地の特性に従った利用行動の枠組みのようなものを市民自身でつくり上げる。そしてなによりもその公園を地域のコミュニティの中核に据える。いま自助・共助・公助という言葉がはやっているが互助という言葉がかけている。共助というのは顔は見えないけれど同じ場面に遭遇している人が助け合う、いま一番足りないのは互助、近隣とか家族とかあるいは学校であるとか顔が見える中でどう助け合うかということができるで共助もない。そういう意味でこれから重要なのは完成したコミュニティのユニットをどれだけ積み上げていくか、行政というものは民意の積み上げた結果なのだと認識が重要だと思っている。
- ・そこで公園のあり方をもう一度抜本的に見直す委員会を国につくった。こういったなかに生田緑地の取り組んでいる姿が紹介されていくようになる。そうすると単に生田

緑地だけでなく日本全国の公園緑地の政策が大きく変わることになる。そういううねりが起きているということをぜひご理解いただきたい。

- ・ みんなの行動は生田緑地を愛してやまないという気持ちからここへ集まり、一所懸命話し合いよりよい公園をつくろうという動機ですべてがスタートしている。その成果が大きく公共施設あるいは社会資本といったものの役割、機能を見直す大きなきっかけになっているということをぜひ理解して頂きたいと思う。
- ・ 今日みんなの話し合いのなかから出てきたマナーの話、端的なことを言うといま沖縄の海洋博記念公園で偽物のエコガイドがどんどん横行している。エコツアーアと称するものが実は磯の生物をめちゃめちゃにしている。この時間帯に何人の人を連れてきたら大丈夫なのか、このルートはエコと思っているのかといったルールづくりが全く欠けている。とにかく観光客が入ればいいという発想でまったく見当違いのことをやっている。そのために沖縄の磯が荒れ果て始めている。
- ・ これからガイドするということは非常に重要な役目を持っているが、同時にガイドの質をどのように上げていくかということも非常に重要と思う。そこで仮に生田緑地をガイドすることにより生田緑地を愛してもらうという提案があつたが、インストラクターをどうやって認定していくのか、その水準をどうやって維持していくのかということがみんなの話の中から自主的に出てくると非常に楽しい話になるというような期待も感じている。

【事務局からの連絡】

(事務局)

- ・ 平成 26 年度の活動報告と 27 年度の活動計画書をまだ提出していない団体は期限内に提出すること。